

コミュニケーション研究の哲学的アプローチ (Ⅱ)

—ヤスパースの実存的コミュニケーションについて—

米 沢 弘

Philosophical Approach about Communication (Ⅱ)

About Existential Communication by Karl Jaspers

Hiroshi YONEZAWA

The characteristics of communication study by Karl Jaspers are constructed from the view point of existential reason (Kommunikation von Vernunft und Existenz). In this article I will analyse the characteristics of communication and dyscommunication by K. Jaspers mainly from the existential aspect. I will also introduce a scheme which shows the basic thought of language by K. Jaspers.

I. 実存的コミュニケーションへの助走

ヤスパースのコミュニケーションについての考察を特徴づけるものが、現存在のコミュニケーション、意識一般のコミュニケーション、精神のコミュニケーションに加えて、理性と実存のコミュニケーションが考えられていることは、すでに前稿に述べたごとくよく知られている^{注1)}。

本稿においては、理性と実存のコミュニケーション、とくに実存的コミュニケーションの立場から、その前提となる他のコミュニケーションを展望してみることとしたい。

ヤスパースは、その主著『哲学』の第Ⅱ巻の第3章において主として実存的コミュニケーションのさまざまな特徴について考察を行っているので、本稿においては、はじめに同部分について考えてみることにしよう。

なお、ヤスパースのコミュニケーション論について考える際に、ヤスパースの言語論について考える必要があるので、それについてもあわせて考えてみることにする。

* * *

実存的コミュニケーションについて考えるためには、実存的とならないコミュニケーションに対する不満について考えることから

じめよう。

ヤスパースの述べるように、私はそれぞれの（現存在の、意識一般の、精神の）コミュニケーションにおいて、或る特殊の満足を経験はするが、どの場合でも絶対的な満足を経験することはない。……私は単に一定の方向において——単なる現存在として、自我一般として、或いは理念的全体の機能として、この性格に約束づけられたものとして——存在していたのであって、私自身として存在していたのではなかった。……あらゆる哲学する働きが驚きとともに始まり、世界知が懐疑とともに始まるように、実存開明 (Existenzerhellung) はコミュニケーションの不満の経験とともに始まると考えられる。

現存在 (Dasein) として、さらに意識一般 (Bewußtsein überhaupt) として私たちはどんな不満に直面するのだろうか。

経騷的な現存在としてでさえ、私は（人間は）他の現存在との相互作用を通じてのみ存在する。現実の人間は、伝統や文化がなくしては存在しない。このことは言語について考えてみると明白である。ヤスパースの述べるように孤立した人間というものは、ただ限界表象 (Grenzvorstellung) として存在するのみである。だがこの際にも、人間は客観的な伝統に対して単に容器 (Gefäß) 以上のものである。

また意識一般として、私は（人間は）他の意識とともにある。意識が対象なくしてあり得ないように、自己意識は他の自己意識なしには存在しない。自己意識は、自己のコミュニケーション (Selbstkommunikation) において、自己を自我として自己自身と対立させ、しかも普迎妥当的なものを捉えるために、他の自我のうちに自らを再認しなければならない。だがこのコミュニケーションにおいても、私は任意に代置されるものであり、媒介 (Medium) であるにすぎず、他の自我にとっての jedermann (誰でも) であり普迎的自我

一般であるにすぎない。この種のコミュニケーションにおいて、私は普迎的な自我一般であろうとするが、それにとどまらず私自身になろうとする。

この種的不满に直面して、私は（人間は）孤立的自己存在 (Auf-mir-allein-Stehen) の可能性をめぐる内的闘いに直面する。確かに私だけで孤立しようとすることは、私のうちにひそむ根源的に真実な衝動である。他者が彼自身であろうとしないならば、私は私自身となることができない。他者が私と同じように出会う時に、はじめてコミュニケーション (現存在や意識一般にとどまらない) がおこるのを感じず。また差し伸べた手が、本来的に捉えられないで、単に社会的にしか捉えられない場合の一種の喪失感に似た（しまった）という感情、現存在としては無関係ながら敵対的存在に感じられる圧迫感、嫌いな人間に対して死後もつづくさまざまな感情、それらは実存的意識を暗示するものであり、実存的コミュニケーションへの助走を提示する。

II. 実存的コミュニケーションの特徴^(註2)

これらのさまざまな不満からも予想されるように、実存的コミュニケーションは、その都度の唯一回性を持ってなされ、他者によって代置され得ない二つの自己の間になされるもので、歴史的に相互の創造関係において成立するコミュニケーションである。

ヤスパース自身の説明をさらに引用しよう。実存的コミュニケーションにおいては、私は他者とともに自分に開顯される。この開顯されること (Offenbarwerden) は、同時に自我が自己として、はじめて現実となることである。さらに、このことが生れつきの性質の開明 (Erhellung) であるかのように考えられるならば、私は実存の可能性を放棄することになる。実存の可能性はむしろ、その開顯過程において、自己を明白にしつつ自己を創造するものであるとされる。

実存的コミュニケーションによって開顯される過程は、戦いが同時に愛であるような独特な戦いであり、可能的実存から他の可能的実存を問題とする。それ故に自己の実存のための戦いと他の実存のための戦いが一つである実存のための単独者の戦いとなる。

この実存的コミュニケーションには、或る種のルールがある。その際には優越性や勝利を欲してはならない。この戦いは全く同一の水準に立ってのみなされる。両存在は、知識技能、記憶、疲労度などの技術的な戦いの手段の差異にもかかわらず、一切の力を出し合うことによって水準の同等性をつくり出すものとされる。

それ故に、戦いは同一の水準において行なわれるので、戦いそのものの中にすでに承認があり、設問のうちにすでに肯定があり、またそれ故に、実存的コミュニケーションにおいては、激しい戦いの中にこそ、連帯性が開顯される。

この点で、ヤスパースの実存的立場が、彼自身の言葉をかりれば実存理性の立場となることが明らかとなる。

この種の実存的コミュニケーションの具体例として、私たちは宗教的伝承の中で考えられる師弟の関係を考えてみるのが、それを容易にするだろうが、それはさらに友情、愛情の中にも開顯され得るものであることは言うまでもない。

実存的コミュニケーションに先行する条件は、単独者に対する愛である。だが愛はコミュニケーションを通じて開明される源泉(Quelle)にとどまる。また私と汝(Ich und Du)とは、現存在において分れているが、超越者においては一つである。このような私と汝の統一の存する所には、理解し難いもの(Unbegreiflichen)から絶対的に恩恵不可能なもの(Undenkbaren)への飛躍がある。

実存とコミュニケーションについてのヤスパースの説明は、さらに詳細を極めるが、上

記の要約により考察の場を概括し得たものとして、実存的コミュニケーションの限界状況として、〈沈黙〉と〈孤独〉について追考しておくこととしよう。

* * *

一般的に〈沈黙〉は無為である。だが沈黙はコミュニケーションの機能となる特有な能動性を持つ。沈黙できるということは、コミュニケーションの準備をする自己存在の或る強さの表現である場合がある。たとえば、社交的形式が虚偽の満足をつくり出し、外的なコミュニケーションの外的な豊かさが、本来のコミュニケーションを破壊する時に、沈黙は実存することの可能的な救いとなることができる。もとより単独者は、自己の伝統とむすばれた現存在として、これまで伝わった表現を自己のものとするによってのみ自己となる。しかし彼が、この表現の世界を自己のものにしようとするのは、そうすることによって、それを根源的に実現するためなのである。

〈孤独〉とは、

第1には、それなくしてコミュニケーションそのものが存在しないところの、コミュニケーションにおいて排棄することのできない一つの極である。

第2には、空虚な自我性(Ichheit)の可能性として、深淵にのぞむ本来的な無存在(Nichtsein)の表象である。しかしこの深淵から、私は歴史的決断によって自分を救い出し、コミュニケーションの現実に達せしめようとする。

そして第3には、現在の、他者とのコミュニケーションにおける結合の欠乏であるとともに、この欠乏が排棄されうるかどうかという不確かさである。

ところで、孤独の現象形態としては、

(a)孤独とコミュニケーションの両極の間にある自己存在は、開顯される過程において他者が私とともに彼自身である場合にかぎつ

て自己であり得る。他者が、彼の実存的意志を失う場合には、孤独であることが強制される場合がある。だがこのような挫折の限界状況のうちでも、依然として自己はそれ自身であることができる。それは〈待つこと〉の不安の中での新たな自己生成である。

(b) つぎに、どんな現存在の充実のただ中にあっても、突如として孤独が、可能的な無存在の深淵として、私に開かれることがある。それは、どんなに現存在をヴェールでかざってみても、なお現われるところの可能的な無存在の意識の表現であり、無存在の孤独の深淵に対する驚きは、コミュニケーションへのあらゆる衝動を目覚めさせる。

(c) さらに何が存在するのか、自分はどこに向って突進しているのかということ、本当の意味で知ることができないところの恐しい孤独が存在する。そしてその際に得体の知れない沈黙が訪れる。そして人間はこの沈黙のうちで、全くひとりぼっちとなる。それは可能的実存の準備ともなり得るものだが、このような孤独について語ることは不可能であるといつてよい。

そしてさらに別の形態として、私とともにコミュニケーションを結んだすべての人々が先立って死去して、私ひとりだけが残されるならば、孤独が再び帰ってくる。だがこの際にも人間の孤独は、虚無的な忘却という実存の深淵にのぞんで、超越することの可能性を持っている。それ故に、自己のうちで充たされなかったコミュニケーションを止揚することのできるものは、超越者だけであるということとなる。

なお、念のためにつけ加えれば、ヤスパースによれば、超越することの諸形式は、世界内において浮遊さすこと、実存に訴えること、超越者への祈願などを通じてなされるとされる。これらの諸形式を通じて、あの全体の調和も存在の暗号 (Chiffre) として明らかになるものと言えよう。

そしてまた、真理の体系も、自己となる過程を通じてはじめて獲得され、超越する思想のうちにおいてのみ実現され得るが故に、人間と人間との真のコミュニケーションのうちに立たないならば、哲学体系としていかなる究極的に決定的な真理も存在しないと結論される。

Ⅲ ヤスパースの言語論について^(注13)

ヤスパースは『真理について』の第Ⅱ部、『認識の包括者』の第5章において、〈言語〉について詳細に論じている。ヤスパースの言語論は、その部分だけが単独に出版されて、言語についてまとまった著作としてよく読まれるものだが、言語の問題は、認識の問題、コミュニケーションの問題として重要な意味を持っているので、ヤスパースの言語論全般についてではなく、コミュニケーションとの関係においてのみ、この問題の一部を考えてみることにしよう。

ヤスパースは、おそらく人間研究のどのような分野においても、巨大な文献の中でも、この〈言語問題〉ほど種々様々な精神が互いにひしめき合っているところはないだろうと述べている。

言語は人間の他の諸作品の中の一作品である、とはいっても全般的であるが故に、無類の性格を有する作品である。

また、人間のもろもろの産出活動 (die Hervorbringungen) を次のような順序で整理してみると、

1. あらゆる内なるものは、その客観的現象を「表現」(Ausdruck) において保有する。
2. 表現が単に人間に属するのみではないのに対して、既に道具や日用品の産出——技術的行為でも、魔術的行為でも、儀式的行為でも——特種的に人間的である。
3. 共同体の形成のために、もろもろの習俗、社会的組織、国家、法規が産出される。

4. 芸術, 文学, 科学, 哲学においては,
作品は自己目的として創造される。

このように整理して考えた場合, 言語は同時にそれらすべてである。つまり言語は, 表現であり, 道具であり, 共同体の創設であり, 独立した作品である。

そしてさらに, これらすべてが, そのつど言語と呼ばれ得るものであるが, しかし言語そのものは特殊形態におけるこれらのいずれでもない。言語はその本質において, いかなる特殊性でもない。むしろ言語は全人間的作品である。

人間のコミュニケーションを考える場合に, 確かに現在では言語的コミュニケーションのみでなく, non-verbal communication も考えなければならないが, 少なくとも意識的コミュニケーション活動を考える際には, それらは言語的コミュニケーションを補うものと考えることができよう。

ヤスパースによれば, 言語はただ研究の客体であるのみでなく, 限界でもある。言語はわれわれの思想から分離され得ないように, それ自身を対象として探求する際にも常に用いられており, また遍在している。ということは, 言語とは何であるかということは, 言語がどのようなものとして対象となるかということ以上のことである。

また, われわれの思惟は伝達であるが故に言語活動に結びつけられている。私は, 私の理解を少なくとも私自身に伝達することなしには了解し得ない。またそれ故に, 言語は思想を他人に伝えるために避けることができないばかりでなく, われわれは, われわれ自身に対しても言語的にのみ思想を伝達する。

さらに重要な指摘として, あらゆる言語表現が根源的には隠喩的 (Metapher) であるということと, そしてすべてのいわゆる本来的表現は, その本質が意識から失われてしまっている或る慣れ親しんでいる隠喩であることを忘却していることである。

ところでコミュニケーションと言語の問題に関して, 記号 (Zeichen) と言葉の相違についてヤスパースは興味のある対照表をかかげているので, それを引用しておくこととしよう。

〈記号は〉	〈言葉は〉
<p>随意的 (willkürlich) であり, 発明されてい て, 発明とともに直 ちに定義されている。</p>	<p>歴史的に生成したの であって, 使用にお いて展開された, 無 限定に豊富な, もろ もろの意義の担い 手である。</p>
<p>一義的である。 その一義性にお いて生命を欠いて おり, 方法的に 熟達しうる機能 に役立つ。それ は一つの確立し た意味である。</p>	<p>多義的である。 ただ記号存在を 基準にしてのみ 多義的であ って, 実際には, 動的ではある がこの言葉に おいてその つど結晶す るところの, 意 味, 本質, 事 柄, 経験につ いての自覚の 世界である。 それは固定す ることなく 意義を変化さ せる生命であ る。</p>
<p>有限的な意義であ って, 意識一般 にとつてのみ 妥当し, 雰囲気 や背景なしに 存在する。</p>	<p>包括者によ って担われ ている。</p>
<p>その定義にお いて汲みつく されてお り, したが って原理 においては 他の等価 の記号 によって 取り替え られる。</p>	<p>取り替 えること ができ ず, したが って Ge müt, Ge ist, I dee, E sprit, Elan などの ように しても 翻訳す ることが できない。</p>
<p>(批判の基準は, 最 も単純な 表現への 技術的 適用性 (techni sche Brauch barkeit) であり, 多様性 の操作 を最も 都合よ く可能 にする こと である。</p>	<p>言葉の内 には, 本 来的な 謎であ るところ の残余 が残っ ている。</p>
<p>発明者にと つて, 彼 が最初 に考え ていな かった さまざ まな 可能性</p>	

が使用に際してそれによって示される場合にも、余す所なく明晰である。

言葉の響(Klag)は重要でないわけではないが、しかし言葉は響きとして十分には特徴づけられてはおらず、ましていわんや連想によってはなおさらのこと特徴づけられてはいない。最も遠い言語からの言葉は、或る気分(Stimmung)を伝える。(tabu, totem, mana, 道, atman など)

われわれがそれであるところの包括者

存在自身がそれであるところの包括者

	↓		↓
内在的なもの→	現存在 意識一般 精神		世界
超越的なもの→	実存		超越者
	理性		

↑
包括者 (das Umgreifende) の諸様態のわれわれの内なる紐帯 (注4)

(注3)

この記号と比較した言葉の特性は、言語によるコミュニケーションの特徴と可能性を考えるための興味のある比較と考えられる。

* * *

広汎なヤスパースのコミュニケーションについての考察の中から、実存的コミュニケーションと言語についてのみを、ヤスパース自身の表現により考えてみた。

短い要約で、ヤスパースのコミュニケーション論の特徴を必ずしも明瞭にはできなかったが、若干の問題点の指摘となった部分もあったことだろう。

付記

なお、今回は、主としてヤスパースの実存的コミュニケーションの特徴にかぎって考えてきたが、すでに前編において述べたように、ヤスパース自身、最後期の『真理について』においては、実存のコミュニケーションと理性のコミュニケーションとを分けている。ではヤスパース哲学において実存と理性との関係はどうなっているのか、またすでに言及した超越との関係についても、それがどうなっているかを述べなければならないが、紙数の関係もあるので、以下の一表を添記することにとめる。

ヤスパースの包括者概念は、ヤスパース哲学を特徴づけるものだが、主題が大きくなりすぎるので、今回は、その説明は省略するが詳細は^(注3)の同部分について見られたい。

(注)

- (1) 先行論文とは、「コミュニケーション研究の哲学的アプローチ(I)、ヤスパースの Kommunikation 概念について」『情報研究, No. 1』1980年12月刊, 文教大学情報学部
- (2) 今回の実存的コミュニケーションについての説明は, Karl Jaspers, "Philosophie II, Existenz-erhellung", Berlin, Göttingen, Heidelberg, 1932. p. 50~60, 日本語訳は, 草薙正夫, 信太正三訳『哲学II, 実存開明』創文社, 1964, p. 61~72,
- (3) 言語の問題については, Karl Jaspers, "Von der Wahrheit" München, 1958, S. 395 ff. 日本語訳は, 小林靖富訳『真理について, II』 p. 325 ff.
- (4) 包括者の図式については, 上掲書(注3)のS. 47 ff. 同訳p. 101 ff. 包括者の説明については, 同部分の「包括者の分節化の予備的構想」についてみられたい。

(受付 1981年9月28日)